



NANASHINO-TOUHOKU KENJIN  
**VALKYRIES**  
SABRA CHRONICLES

## 登場人物

### ■ サブラ・グリーンゴールド

本作の主人公。

シャローム学園所属のヴァルキリー。

シャローム学園軍中佐であり、海軍特殊部隊シャイエテット13に所属している。イスラエルの国益のためならばありとあらゆる悪行を正当化する人間の屑である。

S中佐という姉妹同然の親友がおり、声や姿、髪型、身長、体重、腹筋の割れ方まで酷似しているが決して同一人物ではない。

### ■ レア・アンシエル

シャローム学園所属のヴァルキリー。

サブラとは旧知の仲。

アルカにおいては希有な人間の鑑である。

サブラ・グリーンゴールドとS中佐の秘密を知る数少ない人物の一人。

■ マリア・パステルナーク

元ヴォルクグラード学園軍大佐及びヴォルクグラード人民学園生徒会長。生前はアルカ最高の英雄と呼ばれていた優秀なヴァルキリーだったが、その正体は自らの権力基盤を盤石なものにするため反対派の生徒達を虐殺した人間の屑である。

■ ノエル・フォルテンマイヤー

シュネーヴァルト学園所属のヴァルキリー。  
シュネーヴァルト学園軍中尉でタスクフォース609に身を置いている。  
最初に生まれたヴァルキリーであり、テウルギストと呼称される人間の屑である。

■ クリスティーナ・ラスコワ

通称クリス。

トランシルヴァニア学園の一般生徒。

学業の傍ら、アルカ学園大戦についてのノンフィクション小説を執筆、発表し自己承認欲求を満たす人間の屑である。

■ X生徒会

シャローム学園の事実上の支配者。  
三体のモノリスで構成されている。

## 用語

### ■ アルカ

アポカリプス・ナウ後の世界を事実上支配している巨大多国籍企業グレン&グレンダ社が考案した、学園同士が世界各国の代理戦争を行う場所。

日本の山形県を丸ごと接收、転用しており、かつての市や町の一つ一つに各国の代理勢力となる学園都市及び軍事施設が配置されている。

### ■ B F

アルカにおいて代理戦争が行われる場所、通称バトルフィールドの略称。

『高地を三日間守る』『どちらかが全滅するまで戦う』等、毎回異なった勝利条件と敗北条件が設定される。

### ■ プロトタイプ

アルカ学園大戦で『学園』というコミュニティの根幹を成す戦闘用の人造人間。

常人の数倍の成長速度と寿命を有し、ほぼ全ての個体が強い戦闘衝動を持つようにプログラムされている。

## ■ ヴァルキリー

大量生産されるプロトタイプの中で、地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石と、それに含有されるマナ・エネルギーとの親和性を有した少女達。

液化化したマナ・エネルギーが固着して形成されるマナ・ローブを纏うことで戦車の装甲と火力、戦闘機の数と機動性を人間サイズで実現している。

背部ユニットを使つての飛行やマナ・フィールドと呼ばれる堅固な防御障壁の展開が可能だけでなく、個体によつてはグレン&グレンダ社によつてブラックボックス化された強力なマナ・エネルギー兵器を使用することができる。

## ■ タスクフォース

B Fで代理戦争を行うため、学園軍から一時的に編成される部隊の総称。  
その規模は十名に満たないものから師団規模の大部隊まで多種多様である。

■ シャローム学園

アルカにおけるイスラエルの代理勢力。

学園都市はアルカ西部のツルオカスタン・カモ自治区にある。

■ トランシルヴァニア学園

アルカにおけるハンガリーの代理勢力。

学園都市はアルカ南東部のフェルニゲシュ・コシュティ（旧名上山市）。

■ ヴォルクグラード人民学園

アルカにおけるソビエト社会主義共和国連邦の代理勢力。

学園都市はアルカ北西部の港町サカタグラード。

■ モサド

イスラエル諜報特務庁及びシャローム学園諜報特務庁。

情報収集だけでなく要人誘拐や暗殺にも長けており、一度ターゲットになればその魔の手から絶対に逃れることはできない。

■ D R F L A

アルカ解放のための民主的改革運動を名乗る反イスラエル武装勢力。

■ スレッジハンマーブックス

クリスが作家契約を結んでいる、世界で唯一アルカ学園大戦についての書籍を専門に発行している出版社。



## P R O M I S E

一九五〇年八月三日。

夜空がマグネシウム・リボンの激しい燃焼によって照らし出された直後、真昼のように明るくなったその五百メートル真下で少女の頭が吹き飛んだ。

骨片混じりの脳漿が勢い良く四散し、千切れた頭部は鈍い音を立てて塹壕の遙か後方に落着する。同時に真鍮製の空莖莢やスチール削り出しのマガジンが幾つも転がる塹壕の中で首から上を失った死体が白いセーラー服を赤く汚して崩れ落ちた。

「とんだ貧乏くじよ。ここの警備はイージーだって聞いてたのに！」

肘と膝を黒いパットで覆ったガーランド・ハイスクール——十八世紀末に発生した巨大隕石の落下と、その後十五年に渡って続いた大規模な戦争で傷つき、巨大多国籍企業グレン&グレンダ社によって支配されたどうしようもない世界の中で各国が学園を使った代理戦争を行う地、アルカにおけるアメリカ合衆国の代理勢力——の女子生徒は無残な有様になった仲間の死体を見て悪態をつく。そしてショートカットの髪を揺らす彼女は通信販売で買ったグローブに包まれている手をセーラー服の上に羽織ったチェストリグ（注1）に入れ、二十九発の七・六二m弾が装填された新しいマガジンをソ連製AK47自動小銃へ突っ込むと、本体右側のチャージングハンドルを引いて薬室に弾丸を装填した。

「イージーだって……」

迫り来る敵兵目掛けて発砲しようとしたとき、彼女の真後ろにあった弾薬庫が吹き飛んで紅蓮の火柱が空を緋色に染めた。その輝きはかつて山形県と呼ばれ、今や誰一人旧名を覚えていない永久戦争地帯の北西部に伸びるショー＆ナイ・エアベースの滑走路を夜の世界に浮かび上がらせた。

続いて迫り来る所属不明の敵兵にM2重機関銃の絶え間ない掃射を浴びせていたトーチカが携帯式ロケット砲の集中攻撃で撃破されてしまう。

「バジャー2・1よりレッドライダーへ、屑共が団体ツアーよ。構わないからスネークアイもナパームもクラスターも全弾ここに落として！」

煉獄と化したコンクリート製特火点から火達磨になった若者達が悲鳴を上げながら飛び出し、倒れ込んで国同士の代理戦争で使い潰される人造人間プロトタイプとしての短い一生を終える阿鼻叫喚を目にした女子生徒は無線機を取るなり悲鳴にも似た声で上空の観測機に待機しているFAC（注2）へ連絡する。

「こちらレッドライダー、四分で攻撃機を……待て、何かが通信に割り込んだ」

「ちよつと！ 割り込んだって何よ！ さっさと——」

直後、無線機に怒声を浴びせた女子生徒のいる塹壕のすぐ目の前で爆発が起きた。鼓膜を引き裂かんばかりの炸裂音が鳴り響き、木っ端微塵に粉碎された仲間の手足や肉片がゴムボールのように地面上でバウンドした。

「あ……あ……」

激しく咳き込んで煤と土だらけになった顔を上げる女子生徒の股間から生暖かい液体が溢れ、太腿の内側を伝ってコルダイト火薬臭い地面に染み込んでいく。

彼女が失禁した理由は、すぐ目の前に戦闘機の数と機動性、戦車の装甲と火力を人間サイズで実現したアルカ学園大戦における生態系の頂点が立っていたからだ。

濃緑色のマナ・ローブを纏い、単独飛行を可能とするユニットを背負ったヴァルキリーという戦乙女は多くのプロトタイプにとって決して抗えない絶対的な存在だった。

だが女子生徒が殺されると確信した瞬間、ヴァルキリーのすぐ後ろで渦巻いていた黒煙の中で青い光が瞬いた。

「——ッ」

ソ連製無反動砲の砲身を右脇に抱えたヴァルキリーは只ならぬ気配を感じて振り向く。そこには戦乙女だけが親和性を持つ青い輝きに照らし出されたダビデの星があった。

注1 前掛け式の予備マガジン入れ。

注2 前線航空管制官。攻撃機への指揮管制や爆撃目標の指示等を行う。



七時間十二分前。

シャローム学園のキブツ——学生寮や図書館等が立ち並ぶ同校生徒達の生活共同体地区はアルカ西部ツルオカスタン・カモ自治区の一角にある。

「ただいま」

緑の芝生や花畑が広がる空間を歩いてキブツ内の学生寮に到着したレア・アンシエルは自室のドアを開けて中に入る。

「アイス買ってきたわよ。出てきなさい」

オリーブドラブ一色の軍服に身を包み、アルカにおけるイスラエルの代理勢力に通う女子生徒は左肩にスリングで掛けていたガリル自動小銃を部屋のラックに戻すと、右手に抱えていた食料入りの紙袋をキッチンのカウンターに置いた。

「おーかーえーりーなーさーいー」

「あのねえ……」

そして『決断的伝説』と筆で書かれた掛け軸が強烈なインパクトを放っている以外にはこれといった印象を受けない簡素な空間に足を踏み入れたレアは部屋の中央で胡坐をかき扇風機に向かっていているルームメイトを見て呆れの溜め息を吐いた。

「あーづーいー」

レアの眼前で黒いスポーツブラとパンツだけを纏い汗だくになりながら生暖かい風を浴び続ける女子生徒の名はタスクフォース・ハブレを指揮するシャローム学園最強のヴァルキリー、サブラ・グリーンゴールド……と姉妹同然の付き合いがあるS中佐という。勿論

S中佐とは艶のある長い黒髪を後ろで纏めている彼女の本当の名前ではない。機密保持の観点から本名を名乗ることを許されていないのだ。

「あづい……」

しかしヌカ・コーラの空瓶を周囲に散らばらせて扇風機から決して離れようとしなない彼女の姿は良くてダメ人間、悪く言えば人間の屑である。

「全く。サブラが見たら頭を抱えるわね」

百七十センチはある長身のルームメイトの女性的なフォームを維持しつつも六つに割れた腹筋や逞しい上腕二頭筋をすっかり見慣れているレアは頭痛が痛いといとも言いたげな様子で眉間に皺を寄せつつ両腰に手を当てる。

「私の親友であるSちゅ……グリーンゴールド中佐はそんなことを言う人ではありません」

明朝体で『あたりめ』と書かれた団扇で扇ぎつつS中佐はそう返す。

「私は道徳的にも社会的にも正当化されたイスラエルというユダヤ人国家のために今も働いています」

「家でゴロゴロしながら扇風機に当たってるだけじゃない」

「道徳的にも社会的にも正当化されたイスラエルというユダヤ人国家のために働いていると扇風機に当たりながらゴロゴロしたくもなります。社会の常識です」

「そんな常識初めて聞いたわよ。ていうか今作ったでしょ」

「一九四八年の五月十四日からは常識です」

部屋に電話がかかってきたのはその時だ。

「もしもし？」

受話器からの声を聞くなり、レアの顔はすぐに真剣なものへと変わる。

そして肩口まで伸びたショートカットを揺らす彼女から受話器を受け取るなり通話相手に「了解しました」と即答したS中佐の姿はつい数十秒前まで扇風機に当たっていた人物のそれとはまるで違っていた。まるで自らをイスラエルの歯車と規定したアルカ始まって以来の恐るべきヴァルキリー、サブラ・グリーンゴールド中佐のようだった。

受話器を置いたS中佐は機械的な素早い動作で部屋のハンガーに掛けられた軍服に手をかける。上着の右胸と左胸にはそれぞれ空挺徽章とシャローム学園海軍特殊部隊シャイエテット13の徽章が付き、左肩部には赤いベレー帽が嵌められている。

「今日の食事当番はサブ……いえ、貴方よ」

背後から声をかけられて振り向くS中佐の瞳に不安げな顔をしたレアの姿が映った。

「私の料理は生ゴミ以下の汚物だと仰っていたではありませんか」

「それでも……今日の食事当番はS中佐なの。不味くたって構わないから今日の食事を作つて、そして私と一緒に食べて。後片付けは私がする」

「すみません。急ぎますので」

「行かないで！」

レアは上着を着て部屋を出て行こうとするS中佐の袖を掴む。

「確かに貴方は優秀なヴァルキリーよ。でも、だからといって無事に帰って来られる保証はどこにもない。みんなそうだった」

二人がルームシェアを行っている学生寮の部屋の片隅にはヴァルキリー時代のレアが仲間達と一緒に写っている写真がある。それが何を意味しているのかレアは話さなかったし、S中佐も自分から聞こうとしたことはなかった。

「必ず戻ります」

向き直ったS中佐は目尻に涙を溜めたレアの手を握り、

「私は歯車が失われた時に何が起きるのかをよく理解しています」

お互いの胸の高さまで持ち上げて優しい笑みを彼女に送った。

「大丈夫です。Sちゅ……いえ、サブラ・グリーンゴルドは果たせない約束はしません」



一体誰がシャローム学園を実質的に支配しているのか？

その答えは、アルカを作り出したグレン&グレンダ社の人間ですら知らない。

「D R F L A」

「アルカ解放のための民主的改革運動」

「現在ショー&ナイ・エアベースのエル・アル航空（注3）機を襲撃しているこの武装勢

力の情報はモサドのデータベース上にさえ存在しません」

アルカの地下深くに存在する巨大な議場でダビデの星と『01』『02』『03』がそれぞれ記された漆黒のモノリス達が言葉を交わす。

生命の息吹が一切感じられない無機質な空間に立つこれらのモノリスこそシャローム学園の真の支配者たるX生徒会であり、アルカにおけるユダヤ人達のブレインだった。

「しかしこの武装勢力は精強かつ十分な装備を有している」

「グレン&グレンダ社。やはり我々とは相容れない存在だったか」

01のモノリスと02のモノリスがそれぞれ電子加工された言葉を発する。

「既にタスクフォース・ハブレを現地に向かわせてあります」

それに対して女声の03が返答した。

「差し当たり、それで彼らの実力が測れましょう」

注3 イスラエルの国営航空会社。



「バリアント2・3、ライフル！ ライフル！」

背部飛行ユニットから伸びる両翼に国籍マークのない所属不明のヴァルキリー達がサー



チライトで照らし出された夜のショー＆ナイ・エアベースに向けて肩のレイルからミサイルを発射する。その目標は駐機中のエル・アル航空機だった。

「ミサイルを落とせ！ 一発でも当てられたら大参事になるぞ！」

庄内空港という防衛目標の旧名を知らないガーランド・ハイスクルのヴァルキリー達は銃撃や自らのマナ・フィールドでミサイルを次々に破壊していく。

「バリアント2・1より各員、ミサイルの誘導方式を切り替える」

「了解」

しかし、一定数が破壊されてからのミサイルはまるで単なる誘導弾ではなく自らの意思を有しているかのような——それこそ、発射した所属不明のヴァルキリーが自分で制御しているかの如く——機動で迫り来る弾丸を易々と回避し、まだイスラエルからの物資を搬出している最中の輸送機へと吸い込まれていく。

「クソ！ 抜かれたぞ！」

ガーランド・ハイスクルのヴァルキリー達は何とか全てのミサイルを撃墜するが、ヴァルキリーそのものの突破を許してしまう。

「独善でアルカを滅茶苦茶にした守銭奴共が！」

所属不明のヴァルキリーは今まさに離陸せんとしていたエル・アル航空機のコックピットにM1バズーカを向ける。しかし砲口からロケット弾が撃ち出されるよりも早く彼女の頭は四散し、輸送機のキャノピーを血で真っ赤に汚した。

「バズ2・1よりレッドライダー、これより排除行動に移ります」

「了解バズ2・1、神のご加護を」

たった今一人の戦乙女を葬ったサブラ・グリーンゴルドは青い粒子を放出しつつ滞空しながらFACとの短いやり取りを済ませ、自分の背後で離陸していくエル・アル航空機をなおも襲わんと試みる三体のヴァルキリーとの交錯進路を取る。

「目標を除去します」

そして全校共通のフォーマットである濃緑色のマナ・ローブを纏った正体不明の敵と違ってオリーブドラブの軍服に身を包み、その上にチェストリグを装備したサブラは手にしたガリル自動小銃の銃口を彼女達へと向け、機械的な動作でそのトリガーを引き、今まで何百回とそうしてきたように過酷なギブシュ（注4）で身に付けたバラス・フレデリック・スキナーのオペラント条件付けを最も残酷な形で実行した。

「私は精神科医が言うところの『生まれた時点で既に殺人に対する嫌悪感や抵抗感が完全に欠落している例外的な二％』なのです」

一人目のヴァルキリーが右手を付け根から吹き飛ばされ、次に頭部そのものを失う。

「戦闘用に調整されているながらも休まずに戦い続けるとBFでのストレスや殺人への罪悪感によって精神に異常を来たす残り九十八％とは異なります」

夜空を舞うサブラは腰から伸びる支持架に装着された飛行ユニットから左右に延びる、イスラエルの国籍マークと敵味方識別用の黄色い三角形が描かれた前進翼を翻しながら考

えるよりも早く木製ハンドガードを掴んでガリル自動小銃の銃口を動かし、黒いアイアンサイトの中央に敵の頭部を合わせた。

これもまた何百回何千回と繰り返してきた訓練と全く同じだった。

七・六二mm弾によって合成樹脂製の疑似頭が貫かれ、反対側からケチャップまみれの千切りキャベツが猛烈な勢いで飛び散る――。

「また私はBFにおいて戦う相手を基本的に自分と同じ存在とは認識していません。私が銃口を向けるのは『人間の言葉を話し、撃てば血を流す人間に似た何か』です」

一点だけ訓練と異なるのは、今ここで撃たれたのは本物の人間に極めて近い存在の頭で、飛び散ったのもキャベツではなく肉と骨片混じりの脳漿であるということだった。

「身近であればあるほど、自分達と姿が似ていれば似ているほど、殺す側は殺される側と同一化しやすい。それは敵を殺せなくなることを意味します」

二人目のヴァルキリーを撃破したサブラは左手にカランビットナイフを逆手に持ち、目にも止まらぬ速さで空を駆け抜けていく。そのまま高速で左回転しながら突進、相手が銃を持って突き出していた右腕を斬り落として背後に回り込む。

「しかし殺される側は自分達と同一の存在ではなく、明確に自分達と違う存在だと認識できれば、同族殺しへの本能的な抵抗感は霧散します」

そして相手が振り向いたと同時にガリル自動小銃の一撃で頭を血の霧へと変えた。  
「つまり私が優秀たる所以は相手よりも早く撃つことができるところにあるのです」

その時である。

「粒子ビームですね」

突然、サブラの左側から彼女が口にした通りのものが迫ってくる。サブラは反射的に展開した円形状のマナ・フィールドでそれを弾いた。今は結われていない黒く艶のある長髪が微震し、広がった幾筋もの輝きが光の壁の上を走る。

「ユダヤ人はただの屑に過ぎない。だが人類全体の脅威なんだ！」

右手に大型のマナ・パルスランチャーを装備したヴァルキリーが夥しい量の青い粒子を振り撒きつつ左右に急機動を行いながら近付いてくる。

「そしてユダヤ人を絶滅させないと世界そのものが敗北してしまう！」

「先程の新型ミサイル……そしてこのクラスのマナ・エネルギー兵器。やはりモサドの情報通りですね」

「グレン&グレンダ社は世界に平和を与えようとした。だがお前達はどうだ！ 自分達のことばかり考えて！」

「少なくとも私が人間と認識しているのは自分達ユダヤ人のみです」

恐らくはグレン&グレンダ社の息がかかっているであろうヴァルキリーに冷ややかな視線を浴びせつつ、サブラは迫り来る粒子ビームを回転しながら易々と回避する。

「それ以外はユダヤ人以外のその他大勢に過ぎません」

「そんな考えで世界が平和になるものか！」

「少なくともユダヤ人にとっては限りなく平和に近い世界になります」

夜空を進むサブラは再び迫ってきた幾筋もの粒子ビームを難なく回避し、空中で一回転し頭を下に向けつつガリル自動小銃を発砲した。矢継ぎ早の射撃で放たれた四発の七・六二mm弾がマナ・パルスライフルの機関部を撃ち抜き、爆発に追い込む。

「何故なら複数の無責任な理想主義が対立関係を生むからです」

軍服の襟の周りに汗の輪を作ったサブラは空中に静止したまま、使い物にならなくなつた得物を潔く投げ捨てて突っ込んでくる敵ヴァルキリーの進路を予測して銃撃を浴びせる。それでもヴァルキリーはマナ・フィールドで銃弾を弾きながら肉薄してきた。

「それを防ぐためにはイスラエルやユダヤ人と敵対、もしくは敵対する可能性のある全ての存在を予め排除するか、自分達の絶対的な管理下に置くことが必要です」

「そんなことをしてみろ！」

眼前にまで距離を詰めてきたヴァルキリーが横薙ぎの鉦の一閃を浴びせてくる。サブラはそれをガリル自動小銃の木製ハンドガードで瞬時に受け止めた。

「ユダヤ人から一方的に敵というレッテルを貼られた人々は理不尽な暴虐の中で憎悪を募らせ、間違はなくお前達への復讐を誓うぞ！」

「例え憎悪を募らせ、復讐を誓ったところでそれらの有象無象が我々に勝てるとは到底思えません」

「勝つか負けるかは重要じゃない。憎悪の捌け口を求め、復讐を誓った者達はどれだけの

敗北と犠牲を重ねようともイスラエルを攻撃し続けるだろう！」

「その可能性もあるでしょう。しかし私は自分のことをイスラエルという道徳的にも社会的にも正当化されたユダヤ人国家の歯車と認識しています」

ヴァルキリーが激昂していく一方でサブラは涼しげな表情を崩さないまま鉦の連撃を回避し、本来近接戦用の武器ではないイスラエル製の小火器で受け止め続ける。

「歯車は自分では考えません」

ガリル自動小銃の金属部品に刃が激突するたび重低音が鳴り響き、緋色の火花が散る。

「仮に私のせいでどこかの民族がイスラエルに対して明日なき武力闘争を挑み、その薫陶を受けた子供がテルアビブの中心部で自爆しても、それは私の責任ではありません」

「では誰の——」

「それは私にそうしろと命令したイスラエルやユダヤ人達の責任です」

サブラは空いている左手でカランビットナイフを腰の鞘から抜き取り、鏢迫り合いに意識を向けていたヴァルキリーに対して奇襲めいた鋭い斬撃を浴びせる。

「化け物が！」

ヴァルキリーの左腕が切り離されて赤黒い血液が飛び散ったが、当の本人は激痛に顔を歪めただけで構わずに右手でもう一本の鉦を振り上げた。

「そうやって思考を止めて心も殺しているから、平気でそんな戯言を言えるんだ！」

「思考を止めれば苦しまずに済みます。そして心を殺せば幾らでも戦えます」

しかしサブラはガリル自動小銃のマガジンの付け根でその欠けた刃をまたも受け止める。  
「貴方は私を化け物と言いますが、事実上のテロリストである貴方は言わば社会通念上の怪物と言える存在です」

「正当な理由を持って立ち上がった人間をテロリストとは呼べないだろうに！」

「それは貴方の主観であり社会通念そのものではありません。私の主観と社会通念における貴方は単なるテロリスト……つまり排除されるべき化け物です」

「詭弁を！」

一旦距離を取ったヴァルキリーが余裕綽々の様子でチェストリグから新しいマガジンを引き抜くサブラに迫ろうとしたとき、眩い日光が彼女の視界を覆い尽した。

「こちらサンディ・リード。天孫降臨のお時間だ」

そしてサブラの背後から数機のA・1スカイレーダー攻撃機が現れ、ショー＆ナイ・エアベースに展開中のヴァルキリーを爆撃していく。

「こちらバジャー2・1！ いいわよ！ もっとやって！」

地上ではナパームの業火に包まれるどこの馬の骨とも知れないヴァルキリーの姿を見て苦戦を強いられていたガーランド・ハイスカールの生徒達が大歓声を上げ始めた。

「頃合いか……みんな撤退しろ！」

一方、部下達に撤退命令を出したヴァルキリーはフラッシュバン（注5）を投擲して一瞬だけ視界を奪われたサブラにしがみつく。そしてマナ・ローブに吊り下げた手榴弾のピ

ンに人差し指をかけた。

「イスラエルのヴァルキリー、仲間達の脱出を見逃せ。この手榴弾一つでもお互い吹き飛ばぐらいの威力はあるはずだ」

「では今すぐ自爆なさってください」

サブラは顔色一つ変えずにそう言う。

「もしも貴方が本当に仲間を逃がしたいと思うのなら、すぐに自爆するべきでした」  
「なっ……」

自分の命が失われるかもしれない状況にも関わらずサブラは顔色一つ変えない——その恐るべき事實は、彼女の眼鏡の奥にある紫色をした双眸から伸びる冷たい視線以上にヴァルキリーの心胆を寒からしめた。

「しかし貴方にはそれができなかった。つまりそれは、プロトタイプとしての貴方の限界を意味しています」

先に手榴弾のピンを抜いたのはサブラの方だった。

「失うものへの躊躇、現世への未練。本来、国家の国益のため使い潰されるプロトタイプには全く必要のない感情です」

自分のチェストリグに吊下された手榴弾にピンを戻しつつサブラは言う。そして彼女は背を向けて離脱しようとするヴァルキリーの後頭部にガリル自動小銃の狙いを定めた。

「しかし私にそのような感情はありません」



トリガーに触れる彼女の汗で生温かく湿った人差し指に力が込められる。

「何度も言うように、私は単なる歯車に過ぎないのですから」  
あとはいつも通りの事象が黒い銃口の先で起きた。

注4 シャローム学園のヴァルキリー選抜過程。

注5 閃光手榴弾。



七時間十二分後。

キブツにある学生寮には爽やかな夏の朝が訪れていた。

「ただいま」

ショー＆ナイ・エアベースから帰還したS中佐は部屋に戻るなりテーブルで寝息を立てているシャローム学園の女子生徒にそっとタオルをかける。

「んっ……」

レアが目を覚ました。

「おはようございます。すみません、起こしてしまつて。只今戻りました——とグリーンゴード中佐が伝えてくれとのことでした」

無事に戻ってきたルームメイトを見上げたレアは「バカ。遅いわよ」と微笑み、静かな動作でタオルを取って丁寧に折り畳んだ。

「でも許してあげる。無事に帰って来てくれたから——ってサブラに伝えて」  
「当然です」

S 中佐は得意げな様子で眼鏡を直す。

「わたし……失礼、グリンゴールド中佐はアルカ最高にして最強のヴァルキリーですので」

「はいはいわかりました。朝ごはん、まだ食べていないんでしょう？」

「ええ勿論。食べないで来ました。私はレアさんの料理が好きなので」

「下手なお世辞ね。何も出ないわよ」

レアはやれやれと苦笑いしてキッチンへと向かった。

しよっちゅう自分の正体をすっかり口走りかける、少しとぼけたルームメイトの朝食を用意するために。

製本版に続く



<http://utsutenkai.web.fc2.com/>